慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	サン＝ランベールの経済思想： 『百科全書』の項目「奢侈」(1765)から『四季』(1769)へ
Sub Title	La pensée économique de Saint-Lambert : De l'article (1765) aux Saisons (1769)
Author	井上, 櫻子(Inoue, Sakurako)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2015
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.61 (2015. 10) ,p.1- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20151031-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

サン＝ランベールの経済思想
――『百科全書』の項目「奢侈」（1765）から『四季』（1769）へ――

井　上　櫻　子

ジャン＝フランソワ・ド・サン＝ランベールの筆に成る『百科全書』の項目「奢侈」[1)]（第 9 巻、1765 年）は、この大事典に収録された経済関連の項目の中で最も重要なものの一つとされている [2)]。本論考の中で、サン＝ランベールは、18 世紀最大の論争の一つである奢侈論争に加わり、奢侈を擁護する議論を展開している。しかしながら、そのわずか数年後の 1769 年に刊行された詩集『四季』においては、素朴な田園生活を賛美しているのである。ここでいくつかの問題が浮上する。『四季』の主題は、『百科全書』の項目「奢侈」に展開される主張と矛盾しはしないのだろうか。あるいは、サン＝ランベールの奢侈に対する考え方に変化が生じたのだろうか。

本論考では、とくに第四歌「冬」に展開される人類の技芸の発展について

1）Saint-Lambert, l'article « LUXE », dans l'*Encyclopédie*, t. IX, 1765, pp. 763–771.
『百科全書』の項目執筆者については、以下を参照した。Richard N. Schwab, Walter E. Rex and John Lough, *Inventory of Diderot's* Encyclopédie, *SVEC* 80, 83, 85, 91, 92, 93, 223, 1971–84 ; Frank A. Kafker et Serena L. Kafler, *The Encyclopedists as individuals : a biographical dictionary of the authors of the* Encyclopédie, *SVEC*, nº 257, 1988.

2）この項目の執筆過程については、以下の論考を参照した。François Moureau, « Le manuscrit de l'article *Luxe* ou l'atelier de Saint-Lambert », dans *Recherche sur Diderot et l'*Encyclopédie, nº 1, 1986, pp. 71–84.

の議論に注目しながら『四季』と『百科全書』の項目「奢侈」との関連性について検討してみたい。そのような作業を通して、この自然の歌の刊行が、サン＝ランベールにとってどのような意味を持ったのかという問題に一つの回答を示したいと思う。

Ⅰ．冬の野における快楽

『四季』の基調をなす素朴な田園生活の賛美という主題は、サン＝ランベールが、イギリスの詩人トムソンによる同名の詩から想を得たものである[3)]。野に生きる喜びを読者に伝えるべく、サン＝ランベールは「序文」および「春」「夏」「秋」の三つの歌において、自然の中に身を置く人間が享受する快楽は、外界から得られる心地よい物理的感覚――ここから自己存在感が生じるとされる――に由来することを繰り返し強調している[4)]。しかしながら、嵐が吹きすさび、万物が死滅する冬の野では、外界から甘美な感覚を獲得するのは困難になってしまう。

荒廃した世界の姿と、
荒れ狂う空の荘厳な暗さ、
闇、そして風が私の悲しみをいや増すのだ[5)]。

3）James Thomson, *The Seasons,* 1726–1730. 18 世紀後半のフランスにおける自然詩の系譜の誕生とトムソンの『四季』との関連については、以下の文献を参照のこと。Margaret Cameron, *L'Influence des* Saisons *de Thomson sur la poésie descriptive en France (1759–1810)*, Genève, Slatkine Reprints, 1975.
1759 年にボンタン夫人によるトムソンの『四季』の仏訳が公刊されると、フランスの詩人たちは競い合うように自然の歌を発表し始めた。こうして誕生したのが 18 世紀に特有のジャンルである描写詩である。

4）Jean-François de Saint-Lambert, *Les Saisons. Poème*, texte établi et présenté par Sakurako Inoué, Classiques Garnier STFM, « Introduction », pp. 19–27 ; « Discours préliminaire », p. 55 ; « Le Printemps », pp. 95–96 ; « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l'Été », p. 170 ; « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l'Automne › », p. 220.

5）*Les Saisons*, « L'Hiver », v. 39–41, pp. 238–239.

やがて雪が降り始め、すべてを覆い尽くしてしまうと、詩人の関心はもはや自然の事物の描写にではなく、人間の発明の才の賛美へと向けられる[6]。なぜなら、それこそが、「自然の過ちをつぐなうもの」[7]とされるからである。一見すると『四季』の基調をなす素朴な田園生活の賛美という主題は、ルソーがその著作の中で繰り返し強調した主張と重なり合うように映る。しかしながら、厳しい自然条件に対抗し、飢えを満たすために人間がさまざまな道具を発明する過程をたどるくだりは、1755 年に発表されたルソーの『人間不平等起源論』に展開される議論と見事な対照をなしている。とりわけ、サン＝ランベールとルソーの見解の相違を最も際立たせるのは、おそらく、人間が精神的に充足した生活を営むには、芸術が必要であるとする詩人の主張であろう。森の中でただ生存に必要なだけの食糧を手にし、平和な生活を送る「よき未開人」のままでとどまっていてはいけない。芸術という華やかな「余剰」が必要不可欠なのである。ここで登場するのが、奢侈を擁護するかのような以下の詩句である。

技芸と生活のうちに優雅さを知った。
快楽の選択にうるさい人々の余暇を楽しませるのは、
創意に富んだ贅沢品。
楽しみ、喜び、愛すべき人である必要に迫られ、
生活にえもいわれぬ魅惑が広がった[8]。

しかし、サン＝ランベールは、ただ華美を追求し、無軌道な享楽的生活を賞賛しているわけではない。彼は芸術の観賞という優雅な快楽に一定の節度を設けようとするのである。

おお愛すべき青春期の甘美な感情よ！

6）*Ibid*., p. 247.
7）*Ibid*., v. 198, p. 247.
8）*Ibid*., v. 294–299, p. 251.

冬の日に、汝はわが悲しみを慰めてくれた、
まだ人生の盛りにあった頃には。
だが、今は芸術と詩神と天才が、
氷霧と北風と嵐の季節に、
同じくらい甘美で、より思慮深い楽しみを与えてくれる[9)]。

「より思慮深い楽しみ」« des plaisirs plus sages » という表現に示されるように、サン＝ランベールは、諸芸術の中でも、特に鑑賞者に快楽と同時に道徳的感化を与えるものを賛美しているのである。

Ⅱ．サン＝ランベールによる演劇擁護

さらに、先の芸術賛美に続く詩行を読み進めてゆくと、詩人が関心を寄せるのは、諸芸術の中でもとりわけ演劇であることが次第に判明する。そして、この演劇をめぐる詩人の言説こそ、「冬」のテクストが、何のために、そして誰に向けて書かれたものであるかが明らかにするのを可能にしてくれるのである。

私は楽しみから徳を学びたい。
コルネリア[10)]、アルヴァレス[11)]、ビュリュス[12)]の言葉に耳を傾けよう。
こうした英雄と一体化した魂は手本を選ぼうとし、
彼らとともに新たな徳を行おうと努める。
そこでは、われわれのあらゆる感情は純粋かつ寛容で、

9）*Ibid*., v. 337–342, p. 253.
10）第二次ポエニ戦争で活躍したスピキオ・アフリカヌスの娘、コルネリア・アフリカナのこと。ロベール・ガルニエ（1544–1590）の悲劇『コルネリア』（1574）のヒロイン。
11）アルヴァレスは、ヴォルテールの悲劇『アルジールあるいはアメリカ人』（1736）の主要登場人物。
12）ビュリュスは、ジャン・ラシーヌの悲劇『ブリタニキュス』（1669）の主要登場人物。

そこでは、私の心は感極まり、不幸な人たちと結ばれる[13)]。

ここでサン＝ランベールは、悲劇におけるミメーシスの機能、すなわち、観客が苦境に立たされる徳高き英雄たちの立場に身を置き、感情レヴェルで同一化するよう促す力を賞賛している。この力こそ、観客を楽しませながら、同時に道徳的感情に目覚めさせることを可能にするものだからである。さらに詩人はこの詩に自ら注釈を付し、道徳教育という観点から演劇の有用性を強調している。劇作家は人々の理性にではなく、感性と想像力に働きかけることによって、モラリストや哲学者[14)]よりも効果的に徳の必要性を説得することが出来るというのである[15)]。演劇の道徳的機能を擁護しようというサン＝ランベールの意志は実に堅固である。というのも、彼は1769年の『四季』初版刊行後、先の詩句への注釈を加え、悲劇が人間の感受性に与える影響について詳細に検討しているからである[16)]。

18世紀の著作に親しんでいる者であれば、このような演劇擁護の議論が、ルソーの『ダランベールへの手紙』の主張と対照的であることは容易に察しがつくであろう[17)]。実際、演劇の社会的有用性を讃えた「冬」の詩句が、ル

13）*Les Saisons*, « L'Hiver », v. 343–348, p. 253.

14）18世紀当時、「哲学者」le philosopheという語には、賢者というニュアンスも含まれていた。

15）« Le moraliste ne parle qu'à la raison, et le poète dramatique parle à l'imagination et au cœur ; le philosophe démontre la nécessité de la vertu, et le poète l'inspire. C'est au théâtre qu'on apprend à l'aimer, parce qu'on la voit en action, et qu'on la voit aimable. » ; *Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l'Hiver › », p. 276.

16）*Ibid.*, pp. 276–277.

17）たとえば、『ダランベールへの手紙』の次のような一節と比較するとよいだろう。« Le théâtre rend la vertu aimable ! Il opère un grand prodige de faire ce que la nature et la raison font avant lui ! » : Rousseau, *Lettre à d'Alembert sur les spectacles*, dans *Œuvres complètes,* édition sous la direction de Bernard Gagnebin et Marcel Raymond, Gallimard, « la Bibliothèque de la Pléiade », t. V, 1995, p. 19. この問題については、以下の拙稿において検討した。« Saint-Lambert contre Rousseau—la fonction des réflexions sur le théâtre dans *Les*

ソーの演劇批判への反論という論争的性格を備えていることは、演劇が君主への道徳教育に貢献しうることを示した注釈[18]の次の一節からより明確になってくる。

> ある共和主義国家がわが国の演劇を禁じた。君主制への愛を抱かせるというのだ。彼らの言い分は正しい。しかしだからこそ、演劇はフランス人には貴重なものとなるはずなのだ[19]。

サン＝ランベールが君主制のもとにあるフランスで演劇、なかでも悲劇が重要な社会的役割を果たすと強調する際、彼の念頭にあるのはヴォルテールであると考えられる。実際、悲劇におけるミメーシスの力を礼賛した一節には、「私はゾピール[20]を助けに駆けつけたいと思い、／ザイール[21]の死にどれほど涙を流したことか！」[22]と、語り手たる詩人が、ヴォルテールの創造した悲劇の世界に没入し、英雄たちと心情的レヴェルで一体化する喜びが高らかに歌い上げられている。さらに、演劇の感化力を力強く説いた「冬」の詩句の結論部には、ヴォルテールに対する詩人の深い敬愛の念をつづった長大な注釈が添えられるのである。この注釈の冒頭で、サン＝ランベールはまずラシーヌとコルネイユを讃えつつも、彼の同時代人の間ではヴォルテールの人気が既に 17 世紀の劇作家のそれよりも上回っていると指摘する。

Saisons— », dans *Études de langue et littérature françaises*, (La Société Japonaise de Langue et Littérature Françaises), nº 88, mars 2006, pp. 27–42.

18）以下の詩行に関する注釈。« Théâtre, où pour instruire et les grands et les rois, » : *Les Saisons*, « L'Hiver », v. 355–356, p. 253.

19）*Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur ‹ L'Hiver › », p. 279.

20）ゾピールは、ヴォルテールの悲劇『狂信、あるいは預言者マホメット』（1741）の主要登場人物。

21）言うまでもなく、ザイールはヴォルテールの同名の悲劇（1732）の主人公である。

22）*Les Saisons*, « L'Hiver », v. 349–350, p. 253.

私は、彼ら［＝ラシーヌとコルネイユ］の悲劇よりも、ヴォルテール氏の悲劇が好きだ。このような見解ははっきり公言されている以上に広く世間に広まっているものだ。その証拠として、ラシーヌやコルネイユの作品よりもヴォルテール氏の悲劇の方が頻繁に上演されている。『マホメット』や『セミラミス』[23] を観て震え上がり、『タンクレディ』[24] や『ザイール』を観て涙する。それなのに、何ものもコルネイユやラシーヌに匹敵しうるものはないと繰り返し言うのである [25]。

多くの観客がヴォルテールの作品が舞台にかけられるのを望みつつも、コルネイユやラシーヌの悲劇が絶対的優位に立つとする同時代人の矛盾したあり方に異を唱えるサン＝ランベールは、以下、悲劇性、作品の主題、道徳的感化力、韻文の力強さなどさまざまな観点からヴォルテールの劇作品とコルネイユおよびラシーヌの悲劇とを比較検討する。そしてフェルネーの賢人の技量が古典の権威として名声を確立している二人の劇作家のそれをはるかに凌駕すると結論付けるのである。

サン＝ランベールが『四季』結論部において、手放しでヴォルテールを賞賛するのはなぜか。一つには、アカデミー・フランセーズ会員であり、パリ文壇に大きな影響力を及ぼしていたヴォルテールの支持を得たいという野心が多少なりとも働いたためと考えられるだろう。実際、ヴォルテールは『四季』を絶賛し、生涯その作者との文通を続けた [26]。そして、1770 年 4 月、サン＝ランベールはおもに『四季』の成功を理由として念願のアカデミー会員に指名されるのである。

23）『セミラミス』は 1746 年に発表されたヴォルテールの悲劇。

24）『タンクレディ』は 1760 年に発表されたヴォルテールの悲劇。

25）*Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l'Hiver › », p. 290.

26）Roger Poirier, *Jean-François de Saint-Lambert (1716–1803). Sa vie, son œuvre*, Pierron, Sarreguemines, 2001, p. 33, p. 68.

Ⅲ．サン＝ランベールの「奢侈論」、ヴォルテールの「奢侈論」

しかし、サン＝ランベールはただ『四季』最終歌に演劇擁護の一節を差し挟むことにより、文学界の有力者に対して表面的な追従を述べようとしているわけではない。というのも、サン＝ランベールのヴォルテールに対する強い意識が確認されるのは、演劇擁護の詩句のみに限らないからである。実際、本論第 1 章で確認したような「冬」の芸術の必要性に関する詩句は、1734 年にシレーで制作され、1736 年に刊行されたヴォルテールの風刺詩『俗世人』に展開される奢侈擁護の詩句をも想起させるものである[27)]。

私は贅沢を愛する、そして惰弱ささえも。
あらゆる快楽、あらゆる芸術、
清潔さ、趣味、装飾も、
オネットムはみなそう考える[28)]。

『俗世人』は、マンデヴィルの『蜂の寓意　私悪すなわち公益』やムロンの『商業に関する政治的試論』といった著作に展開される議論をもとにしたものであり、内容的には決して目新しい要素はないが[29)]、ヴォルテールの切れのよい文体の魅力も相まって、出版直後から大変な反響を呼んだ作品である[30)]。ロレーヌ出身の詩人が奢侈の弊害を力説する多くの哲学者やモラリス

27）Jean Goulemot, Article « Luxe », dans l'*Inventaire Voltaire*, sous la direction de J. Goulemot, André Magnan, Didier Masseau, Révision générale par André Magnan, Gallimard, « Quarto », 1995, p. 867.

28）Voltaire, *Le Mondain* dans *Les Œuvres complètes de Voltaire*, Oxford, The Voltaire Foundation, t. 16, 2003, v. 9–12, p. 295.

29）J. Goulemot, *art. cité*, p. 868.
また、『俗世人』と奢侈擁護の議論については、以下の文献に詳しい。André Morize, *L'Apologie du luxe au XVIIIe siècle et « Le Mondain » de Voltaire*, Genève, Slatkine Reprints, 1970.

30）たとえば、発行の数ヶ月後には、『弁護と反駁』*Le Pour et contre* や『トレヴー誌』*Mémoires de Trévoux* といった定期刊行物に書評が寄せられた。

トに抗し、『奢侈論』を著したという事実を考慮に入れれば、彼が『俗世人』に展開される議論を熟知していたのはほぼ間違いないだろう。

『俗世人』の後半では、パリやロンドン、ローマといった大都会でのみ楽しむことの出来る絵画、彫刻、詩、舞踊、音楽といった諸芸術に惜しみない賛辞が贈られている。かくしてヴォルテールは、「諸芸術の母」[31] としての「富裕さ」を擁護するのである。一方サン＝ランベールも、『四季』の中で素朴な田園生活の美徳を賛美しているとはいえ、全き未開状態を必ずしも人間にとって望ましい状態とは捉えていない。彼は、法の支配のもとに置かれていない最初期の未開人が、時として残忍な殺戮行為さえ辞さないとまで歌っているのである[32]。その意味では、この世での文明生活の魅力を高らかに讃えるヴォルテールと見解を同じくしているとも言えよう。

Ⅳ．ヴォルテールの信奉者から『百科全書』の書き手へ

若き日のサン＝ランベールがヴォルテールに深い敬愛の念を抱いていたのは確かな事実である[33]。とはいえ、彼は決して「偉人」の影響下から脱し得なかったわけではない。『俗世人』と『四季』双方に展開される「余剰」、「贅沢品」の必然性についての議論に注目すると、詩人および作家としての円熟期に達したサン＝ランベールがヴォルテールとはやや異なった見地から奢侈擁護を行っていることが明らかになるのである。

『俗世人』においてヴォルテールが目指したのは、キリスト教的な世界観によるのではなく、人間主義的な観点からの幸福の探求である。そのため、

Voltaire, *Le Mondain*, *éd. citée*, « Introduction », p. 278.

31）Voltaire, *Le Mondain*, dans *op. cit.*, v. 15, p. 295.

32）« Jadis dans les forêts les sauvages humains / Souvent l'un contre l'autre avaient armé leurs mains ; / Sur le sable rougi du sang de l'innocence, / Le sang était encor versé par la vengeance ; » : *Les Saisons*, « L'Hiver », v. 259–262, p. 250.

33）二人がはじめて出会ったのは 1735 年のこととされる。R. Poirier, *op. cit.*, p. 33.

「ああ、この鉄の時代とはなんとすばらしい時代であることか」[34] という詩句や、垢だらけで真っ黒な爪を伸ばし、髪を振り乱し、すっかり日焼けした醜いアダムとイヴの姿[35] に示されるように、ヴォルテールはここで聖書に描かれる黄金時代を徹底的に否定し、現世での快楽や贅沢の追求こそ人間に幸せをもたらすものだと説くのである。

確かにサン＝ランベールもまた、奢侈論を人間の幸福に関する議論の延長線上に据えている。しかし、彼が求めるのは、ヴォルテールのように個人がその感覚をもって享受する充足感ではなく、公共善、すなわち、共同体全体、ひいては人類全体の幸福なのである。『四季』における富の蓄積の擁護は、「アメリカ大陸の発見、および喜望峰を介してのインドへの航海ルートの発見は人類の幸福に貢献したのか」[36]、つまり、文明化された状態と未開状態のいずれが人間にとってより望ましいのかという問題についての考察において展開される。ラオンタンの旅行記や、ルソーの『不平等起源論』に示される、「善き未開人」のイメージの流布によって、18 世紀に盛んに議論された問題である。サン＝ランベールはまず、15 世紀に展開されたヨーロッパ人の「世界進出」は、確かに南北アメリカやアフリカ、アジアの国々に征服戦争にともなう混乱という不幸をもたらしたと認める[37]。しかし、その上で彼は「征服活動」がヨーロッパにもまた災厄をもたらしたと主張する。つまり、新大陸からもたらされた嗜好品がそれまでヨーロッパ人に未知のものであった病を広め、海外植民地からスペインに集約された金銀はカール五世およびハプスブルク帝国によるヨーロッパ内の征服戦争の要因となったというのである[38]。しかし、このような「征服活動」の時代の弊害を解消するかのように、新たな時代が訪れる。すなわち、「商業」の時代である。「征服活動」による

34）Voltaire, *Le Mondain*, *éd. citée*, v. 21, p. 296.

35）« Avouez-moi que vous aviez tous deux, / Les ongles longs, un peu noirs et crasseux ; / La chevelure assez mal ordonnée, / Le teint bruni, la peau bise et tannée. » : Voltaire, *Le Mondain, éd. citée*, v. 50–53, p. 298.

36）*Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l'Hiver › », p. 283.

37）*Ibid.*, pp. 283–285.

38）*Ibid.*, p. 285.

混乱という災厄をもたらしたのはスペインというヨーロッパの国であるが、これに対する治療薬として「商業」を発達させたのもやはり同じくヨーロッパの国であった。すなわち、イギリスとオランダである。

> しかし、スペインの財を共有したいという思いが、イギリスとオランダを目覚めさせた。航海技術は洗練され、商業の精神が導入され、その原則が認められた。ほぼこの時期に、新たな発見はヨーロッパにとっていくぶん有用なものとなり、両インド[39]にとっては有害なものではなくなったのである[40]。

15 世紀、アメリカと喜望峰の発見をもって幕を開けた大航海時代は、確かに新旧の両世界に弊害をもたらしたかもしれない。しかし、それは文明化の否定には決してつながらない。「新たな発見」のもたらした病は、それよりもさらに「新しい発見」をもって治療すべきであるし、またそうすることが可能である――これが、サン＝ランベールの主張である。それでは、商業はどのように人類に貢献するのか。

> 商業が広まり、交易が行われるようになると、富が生まれた。これはいわば、あらゆる国の動産である。ある国民の破滅は、ほかのすべての国民の破滅につながるが、こうした破滅はもはや戦争の結果ということはなくなる。そして、戦争は次第に行われなくなるはずだ。
>
> 産業が促進され、人々は新たな技芸と新たな機械を獲得する。ヨーロッパの大都市で 1 万リーヴルの年金を有する人は、世界の支配者であったアウグストゥス帝でさえ与り知ることの出来なかった数多くの文明の利器を享受するのだ[41]。

39）アメリカ大陸とインドを指す。

40）*Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l'Hiver › », p. 285.

41）*Ibid.*, pp. 286–287.

サン＝ランベールによると、商業は「富」の蓄積に貢献するが、この「富」はすべての国によって共有され、支えられるものであるとされる。したがって、人類共通の「富」の保持、および商業の発展のためには、戦争は次第に行わなくなるはずだというのである。また、古代ローマ帝国の皇帝より、18 世紀に潤沢に財産を有するヨーロッパの都会人の方が快適な生活を送っているという一節をもって、サン＝ランベールは、自分が進歩史観を支持することを全面的に押し出している。

確かに、商業擁護の議論は、サン＝ランベールが敬愛してやまなかったヴォルテールの『哲学書簡』にも見出されるものである[42)]。しかし、ヴォルテールの商業の議論は、自由の国イギリスを賛美すると同時に、自らの祖先である商人という身分を擁護すること[43)]を目的としたものであった。『四季』の作者による商業擁護の議論は、ヴォルテールとは異なる見地で展開されている。というのも、実は、この「冬」の注釈に展開される進歩史観に根ざした商業と産業の礼賛は、サン＝ランベール自身が『百科全書』の一項目「奢侈」において、展開した議論と重なりあうものだからである。

> これほどまでに商業が発展し、産業が広く広まり、数々の技芸が洗練された以上、もはやヨーロッパをかつての素朴な生活へと引き戻そうなどと考えることはやめよう。それは、ヨーロッパを惰弱な未開状態へ連れ戻すようなものだ。「奢侈」がどれほど人類の幸福に貢献するかという点については、また機会を改めて論じることにしたい。しかし、本項目を通して、国威と国力に貢献すること、奢侈を推奨し、その内実を解明し、管理しなくてはならないことが明らかになったのではないかと自負している[44)]。

「冬」の注釈、そして項目「奢侈」に展開される人類の進歩に対する信頼の

42）Cf. Voltaire, *Lettres philosophiques*, Xe lettre « Sur le commerce ».
43）ヴォルテールの祖父は、毛織物商人であった。
44）Saint-Lambert, article « LUXE », dans l'*Encyclopédie*, t. IX, 1765, p. 770.

念は、サン＝ランベールのみならず、百科全書派の思想家に共有されていたことは言うまでもない。

そして、サン＝ランベールが、『四季』において素朴な田園生活を賛美していたとしても、それは文明の手による介入のない未開状態を理想化し、奢侈の弊害を糾弾しようとしてのことではない。なぜなら、『四季』において平穏な田園生活の美徳を歌った詩句の中にも、『百科全書』の項目に展開される奢侈擁護の議論の延長線上にあるとみなしうるものが確かに認められるからである。

『四季』第二歌「夏」に目を移してみよう。第二歌は、大地からの恵みをより豊かにする技芸、すなわち、農業が人々にもたらす幸福の礼賛に充てられたものであるが[45]、この中で詩人は、農村の繁栄は、ひとえに統治する行政官の人格に左右されると力説している。

私は見た、宮廷の奴隷であり、
君主の敵たる州を統治する行政官が、
ケレスと飢えによって刈入れを命じられた
不幸な地域に苦役を命ずるのを。
昨年の小麦はもう食べ尽くされた、
今もなお目に浮かぶ、不幸な寡婦、
弱々しい孤児、疲弊しきった老人が、
涙しながら、義務づけられた仕事に向うさまが[46]。

この詩句に付せられた注釈において、サン＝ランベールは、苦役を「不幸な人に隷属状態の重圧を痛感させる」[47] 重大な害悪として糾弾し、公平な立場に立ち、共同体の幸福を目指す善き統治者の必要性を強く訴えている。

45）*Les Saisons*, « L'Été », v. 93–106, p. 134 ; « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l'Été › », p. 171.
46）*Les Saisons*, « L'Été », v. 421–428, p. 152.
47）*Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l'Été › », p. 177.

苦役を課す行政官を断罪したこの『四季』の詩句は、『百科全書』に展開される奢侈擁護の議論と関連づけることが可能であろう。サン＝ランベールはここで、農村の荒廃につながるとして奢侈を好む風潮を非難する人々に反論している。

> 奢侈がきわめて広範に広まり、農村が荒廃している王国に目を向けてみよう。ただ、この災厄の原因を都市の奢侈に見出す前に、この王国の行政官たちのふるまいはどのようであったかと考えるのだ。（中略）
>
> こうした国で、農村の住民に税や苦役を過剰に課したからこそ、（中略）彼らの一部は農村を捨て、食糧を求めて都市へ向わざるを得なくなったのだ[48)]。

「奢侈」そのものには、習俗を頽廃させ、人々の間に不平等を生み出すといった害悪をもたらす要因はない。求められるのは、統治者の良識である——サン＝ランベールのこのような主張は、彼の筆に成る『百科全書』の重要な項目「立法者」を想起させるものでもある。そして実際、『四季』改訂版の「夏」には、項目「立法者」を踏まえた注記が加筆されるのである[49)]。

***

本来『百科全書』の項目の一つとして執筆された「奢侈」が、1764 年、独立した論考として発行されたのは、既に文筆家としての名声を確立していたサン＝ランベールが、間近に迫った『百科全書』の刊行再開に先立ち、大事典の宣伝をするという目的があった[50)]。グラフィニー夫人によれば、サン

48）Saint-Lambert, l'article « LUXE » dans l'*Encyclopédie*, t. IX, 1765, p. 766.

49）*Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l'Été › », pp. 174–175.
なお、この問題については、既に別の拙稿で論じている。« Jean-François de Saint-Lambert, lecteur et collaborateur de l'*Encyclopédie* : autour d'une note de ‹ l'Été › dans *Les Saisons* »,『「百科全書」・啓蒙研究論集』（『百科全書』研究会）、第 2 号、pp. 115–130.

50）R. Poirier, *op. cit.*, p. 169 ; *Correspondance littéraire*, 15 mars 1764, Paris,

＝ランベールは青年期から韻文による作品の発表にことのほか強いこだわりを見せていたとされる[51)]。作家としてのキャリアを積むにあたり、サン＝ランベールが特に範としたのが、詩人および劇作家として高い名声を得ていたヴォルテールである。しかし、1769 年、30 年以上もの年月をかけて推敲を重ねた結果である『四季』を出版したサン＝ランベールには、自然の讃歌という当時としては斬新な主題を取り上げ、詩人としての名声を確立しようという野心以外に、もう一つの明確な目的があった。それは、発禁処分が解けない中で、刊行が進められていた『百科全書』の弁護である。実際、文明の発達の是非について検討した「冬」の注釈は、大事典の編集者であるディドロとダランベールへの惜しみない賛辞をもって締めくくられる。

> 人類の幸福に必要なあらゆる事物についての知識は増え、そしてそれは失われることはないだろう。『百科全書』の編集者たちは、人類に不滅の貢献をしたのだ。この事典には出来の悪い項目が数多く見受けられるかもしれないが、それはこの二人の傑出した人物によるものではないし、また、それでもなお、この事典が諸技芸および諸学問の宝庫であることは確かである。人間の精神は、コンスタンティヌス帝の治世から 15 世紀の間に行われたように後退することは出来ない。天変地異が起こらない限り、野蛮状態に戻ることはないのだ[52)]。

『四季』は、当初イギリスの詩人トムソンの同名の詩に想を得、危機に瀕していたフランス詩に新たな息吹を吹き込むために手がけられた作品であった。しかし、その作者がロレーヌからパリへと上京し、パリ文壇で活躍していた思想家たちと交わる中で、『四季』は単なる自然の歌であることをやめ、『百科全書』の寄稿者の道徳的思索を強く反映する一種の哲学詩へと変貌して

Garnier Frères, t. V, 1878, Kraus Reprint, 1968, p. 465.

51）*Correspondance de Mme de Graffigny*, Oxford, The Voltaire Foundation, t. V, 1996, à Devaux, le vendredi 3 avril 1744, nº 676, pp. 185–187.

52）*Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l'Hiver › », p. 289.

いった。実際、サン＝ランベール自身によって加えられた『四季』注記には、作品の理解のために読者を『百科全書』の多くの項目へと差し向けるものが数多く見受けられる。この事実は、サン＝ランベールの百科全書派としての功績と詩人としての功績が不可分であることを示している[53)]。

同時代の読者には高い評価を受けたにもかかわらず、サン＝ランベールの『四季』は、文学史の中で長い間忘れられた作品であった。しかし、この作品に展開される人間論に注目することは、18 世紀末における叙情詩の復活という問題に対するさまざまな回答を準備することを可能にしてくれるのみならず、『百科全書』のいくつかの項目の理解を確実に助けてくれるはずである。

付記：本研究成果は、平成 27 年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究（C）（課題番号 26370366）の助成を受けたものである。

53）サン＝ランベールのみならず、他の『百科全書』への寄稿者も、しばしば自らの作品とこの大事典が密接な関係にあることを示そうとした。その例としては、ダランベールが挙げられる。この問題については、また稿を改めて論じたい。